
麻帆良在住、葛木メディアでございますっ！

夏色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良在住、葛木メディアでございますっ！

【Nコード】

N84690

【作者名】

夏色

【あらすじ】

西日本にある海に面した地方都市、冬木。

その土地にある円蔵山が龍洞寺。長い歴史を持つ寺の地下深くに突如出現した神殿で、二人の男女が死に瀕していた。

殺人鬼、葛木宗一郎。そして人ならざる英霊、キャスターのサーヴァント。

だがしかし金色の英雄王により致命傷を受けた二人は、気がつけば麻帆良と呼ばれる、巨大な樹が聳える見知らぬ広場に横たわっていた？！

異世界に流された葛木夫妻の穏やかな、そして波乱を交えた日々を、
どうぞお楽しみください。

Prologue 1 (前書き)

このssは『Fate/stay night』と『魔法先生ネギま!』のクロスオーバーです。

麻帆良にキャス子さんと葛木先生がトリップします。

おそらくシリウスとほのぼのの間を行ったり来たりすると思います。

作者は他に連載を数個抱える身なので、定期的な更新をお約束できません。

また色々試験的な表現や書き方などを導入しているので、コロコロ文体が変わるかもしれません。

(このssはArcadia様にも投稿させて頂いております)

それでもキャス子に幸せになって欲しい方のみお読み下さい。
頑張つて執筆していきますので、どうぞ宜しく願います。

Prologue 1

麻帆良。

長きにわたる鎖国から解き放たれ、世界に名だたる列強諸国に追いついたとした時の日本政府が創立した、一世紀以上の歴史を持つ世界有数の学園都市の名である。

そこに居住しているのは都市内に数多く存在する学校に通う生徒や教職、関係者。学園都市の様々な店や公共機関の職員など。

基本的に流通以外の殆どがこの街の中で賄われているがために、もはやその様相は陸の孤島と呼ばれるに足る。

生徒達はおろか、教職員や家族であっても全く外部に出る必要がない。

そして外部からも限定的ながら関係者以外の出入りが制限されている。

ある意味では治外法権さえ程度によって許可されているこの街は、常識的に考えれば異常極まりない。

何故この街がここまで異常であるのか。

また何故その異常さに気付けないのか。

その理由の一端がまさに、とある場所にて説明されようとしていた。

この街には親しみを込めて『世界樹』と呼ばれる大樹がある。

広大な学園都市の何処からでも——当然ながら建物が邪魔をする場合はこの限りではないけれど——目にするこのことができるソレ

は、地面というよりは地球に根を張っているというのが相応しい程に巨大である。

まさにギネス級の代物ではあるが、不思議と今まで外部のマスコミからの取材などは受けたことがない。

『世界樹をこよなく愛する友の会』やら何やらが裏で精力的に活動しているのだという根も葉も無い噂や、この学園都市に隠された、とある者達によるものであるのだという真実もあるが、つまるところ皆、世界樹と麻帆良が好きなのだ。

そして世界樹のちょうど麓——根本や木陰と呼ばれない辺りが世界樹の巨大さを如実に表していると思う——に位置する広場で、一つの神秘が具現しつつあった。

ドラマや映画のように上空からその広場を観察していれば、特によく異常を観測することができただろう。

まず広場の中心部——とはいっても世界樹の目の前というだけであり、厳密に中心というわけではない——に異常は現れた。

一つ、まるで針で穿ったかのように空間に小さな揺らぎを認めることができるだろうか。

おそらくは目の良い、もしくは勘の良い者にしか気づけなかっただろうが、中空の一点に僅かな揺らぎが見えるはずだ。

その揺らぎが次の瞬間には瞬く間に広がり、背景を捻じ曲げている。

例えばその背景がゼリーや粘土に書かれていたら、おそらくは今の状況と同じように見えたことだろう。

だがしかし永遠に続くかと思われた広がっていく揺らぎの大きさは、丁度この学園の学園長室の扉ほど、簡潔に言えば人が二人ほど並んで立てるぐらいの広さで浸食を止めた。

揺らぎは空間をめちゃくちゃに歪ませ、そこがどうなっているの

か視認させない。

グシャグシャにしたチラシの文字は読みづらিদらう。正しくそれと同じ状況だ。

そして一度グシャグシャに丸められた空間が再度広がって元の平穏を取り戻したとき――。

広場には、さっきまでは無かった二つの人影を認めることができた。

「　ここは　？」

二つの人影の内の、小さな方が僅かに身じろぎした。

まず受ける印象は紫色。全身を紫色のローブで覆っているのだ。

時代錯誤も甚だしい、古風で優美なローブは見るからに上等な仕立て。

背中ぐらいいしか見えないためにしかと断言はできないが、輪郭や声などから判断するにおそらくは女性であろう。

まだ女を捨てるには早すぎる、それでいて近所の子供からは下手すればオバサンと呼ばれてしまうぐらいの年頃に見える女性は、肘で体を持ち上げて自分の周りの光景を見回した。

「私の神殿　では、ないわね。大源の色が違う　」

普段はおそらく肩に掛かったフードを被っているであろうが、今は素顔が露わになっている。

綺麗な、女性だった。

群青色の髪の毛は一本一本がきめ細やかで、サイドを三つ編みに

した複雑な髪型をしている。

決して薄化粧ではないにせよ上品に見える朱に彩られた唇は世の男共が目を離せぬ程に美しく、髪の毛と同じ色の瞳は吸い込まれてしまいそうなくらいの深さを感じてしまう。

その瞳は今は、困惑一色に彩られていた。

自分のおかれた状況を全く理解できておらず、辺りから必死で情報を得ようと視線と頭を動かしている。

「私は セイバーのマスターと、アーチャーのマスターを追い詰めるようとして」

思い返すのは記憶の中で一番新しい光景。

万能の願望器を奪い合う戦いの終局近くで、舞台となった街で有数の霊脈に神殿を築き、敵のマスターを誘き寄せた、その光景。

敵の家族を人質にとり、状況だけでなく戦力すらも相手側をはるかに上回っていたはずだ。

あらゆる要素が自分の思い通りに進み、あらゆる要素が勝利へと向かっていると確信した。

その、矢先。

全ての些末な謀り事など力業で押し流してしまう程の数多の金色の光を。

「金色の、サーヴァントは 何処 ? いない ?」

圧倒的な物量。

長い時間をかけて集めた、最優のサーヴァントの斬撃すら防ぐ魔

力の盾をものとしめない圧倒的な物量。

柄にもなく未来を目指して積み上げた全ての所行を嘲笑うかのよう
に三つの光刃が自分の身を突き貫き、目指した未来は――

「――はっ、宗一郎様は、宗一郎様?!」

半ば朦朧と惰性で動いていた頭が瞬時に覚醒した。膝立ちになって、
先程よりも視界を高くして求める者を探す。

未来は、自分が目指した未来は、一体どうなってしまったのか。
記憶にある一番新しい光景は、悪夢のような人生の果て、人生の
終わりの更に向こう側、そこでまたも身に味わうことになった悪夢
の続きに存在したささやかな夢は。

記憶の何処を見回しても寸分変わらぬ、最愛の人物の顔は。

我が身を呈して守ろうとした最愛のマスターの姿を探した彼女は、
ふと地面を探った手が何かに当たるのを感じて視線を向けた。

「宗一郎様っ?!!!」

果たしてそこに、目指した未来は横たわっていた。

最後に目にした深い緑色の素っ気ないスーツはしかし、紅い鮮血
で彩られている。

あふれ出す赤が野外にあってなお清潔な石畳へと広がり、汚して
いる。

診断するまでもない。明らかに致命傷だ。

医者ではなく魔術師である自分の目から見ても、その体躯の隅々
から生命を構成する“なにか”が刻一刻と抜け出しつつあるのが手

に取るように理解できる。

一も二もなかった。彼女は俯せに横たわる男性の顔に両手を沿えて、必死で彼の名前を呼んだ。

「宗一郎様！ 宗一郎様っ！ しつかりなさって下さい宗一郎様！」

いやだ、いやだ、いやだ、いやだいやだいやだ。

何故こんなことになってしまったのか。私はただ、本当にささやかな願いを叶えようとしただけなのに。

生きている間のみならず、死後だって世界は嫌なことばかりだった。

信じるという言葉の意味を、愛するということの本当を、幸せになるという希望を、自分ほど望み、裏切られた者がいるだろうか。

裏切られた、諦めた、流された。何もかもが自分に牙を剥くと歎き、もがき、それでも変わらず、結局はこのザマ。

いつだって、そんなことは望んでいなかった。誰だってそうだろう、本当に些細な幸せを求めていただけなのに、あんな風になってしまうなんて。

しかし誰に望んでも、誰に尽くしても、それを得ることは叶わなかった。

あぐくの果てには見捨てられ、人々の噂の中に魔女として現れる。笑いぐさだろう、結局そうして本当に魔女になってしまった自分がいるのだから。

裏切りの魔女として座に上げられれば後世ですら悪名は語り継がれ、それが信仰にすら昇華したのは何という笑い話か。

記憶と記録を辿り、何度もこんなはずじゃなかったと全てを悔やみ、新たにかりそめの生を受けた先での自身すらも情けなくて笑う。

女神の怒りをつつた哀れな女の末路よと自嘲したその時に、この人に出会えたのはどれほどの奇跡だろうか。

何者をも信じず、神すら敵に回したこの自分が、何かに感謝したくなる程の奇跡だったのだ。

その最愛の人が今まさに目の前で命を落とそうとしている。

命の通貨である血をとめどなく流し、冷たくなってしまおうとしている。

身の毛もよだつような絶望の具現に、彼女は彼以外の全てのことが頭から抜け落ちた。

此処は何処なのか、自分達はどういう状況にいるのか、そもそも何が起こったのか。

尽きぬ疑問はしかし、瑣末事であると切り捨てる暇もなく恐怖一色に塗り潰される。

「ち、治療を　そう、治療をしなきゃ　！」

いやだ、いやだ、いやだ、いやだいやだいやだいや。

やっと手に入れることができると思っただのに、やっと幸せになれると思っただのに、こんなのは嘘だ、こんなのはいやだ！

失う恐怖は全身を震わせ、涙は自然と滝のように零れ落ちる。それでも彼女は頬に添えていた手を傷へと這わせ、必死に治療を試みた。

当然ながら傷は深い。体の前面から背中へといくつもの大きな傷が貫通して穴を作っている。

あの時は常と全く変わらぬ主の様子に、我が身を呈することで武器の豪雨から彼を守ることが出来たとばかり思っていたが、どうやら彼の優しさだったらしい。

あまりの量と速さに閃光かと見間違った魔弾はしかし紛れも無く
剣や槍。

それが貫通したのであるから、当然ながら彼の身に穿たれた傷は
一つ一つが致命傷であった。

「簡単、こんなの何度だってやってきた事なんだから。失敗
なんてしない、失敗なんてしない、失敗なんてしない！こ
んな簡単な治療、手こずった事なんて一度もない！」

幸いだったのはあの金色のサーヴァントが放ってきた武器の中に、
傷の治療を疎外する呪いを持ったものや、解毒の効かない猛毒を持
ったものが含まれていなかったことであろうか。

確かに傷は思わず失うことを想像して声が、手が、傍目に見ても
震えているのが分かってしまう程に深かった。

しかし彼女とて悪名ながらも神代の魔女としてその名を轟かせた
身。決して不可能な治療ではなく、十分に間に合うはずだったのだ。
傷を塞ぎ、臓腑を癒し、失ってしまった生命の力を補充する。

何度だって同じことをやったことがある。一回だって失敗したこ
とはなかった。

恐れから不安定になりつつある心を叱咤激励し、彼女は震えなが
らも自信を持って治療を始めようとした。

しかし――

「あ？　う、そ　　嘘よ　　なんで、こんな　　？！」

今更ながらの説明になるが、彼女は人間ではない。

それでいてそう言われて普通は想像されるような、宇宙人や、吸血鬼や、妖魔や鬼の類でもない。

過去の時代に生き、人の身では到底成し得ない偉業を果たし、死後も人々の信仰によってその存在を精霊に近い場所まで昇華させられた崇高な存在。

そう、彼女は俗に言う『英霊』と呼ばれる存在であった。

つまるところ今は議論に値しない諸々の要素を省いて説明すれば、彼女は死者、乃ち今この現世に存在しているはずのない、存在してはならない身だ。

死者が現世に存在している。この矛盾を解消するには、当然ながらいくつかの条件を必要とすることは想像に難くない。

しかして一刻も早く目の前の男性を治療しようと願う彼女には、その内の一つ、死者を現世に繋ぎ留めるための依り代が欠けていたのだった。

「嘘、嘘よ、こんなの　いやだあ！　どうして、お願い　死なないで　！」

伸ばした手の存在感が薄れ、霞んでいく。

治療をしようと集めた魔力が霧散し、全身から力が抜け、いくらあがいても魔術を使うことができない。

道理だった。元より彼女は現世に喚ばれた際に、『魔術師のサーヴァント』という殻を被せられた身である。

本来人間などに御しきれる存在ではない英霊を現界させるための策の一つとして、彼女は自らの能力の一部を著しく制限されている。もちろん制限された状態であろうが現世に於いて彼女がこと魔術師という枠の中では最強であることには変わりないのだが問題は別

のところにある。

召喚されたサーヴァントがマスターに従うにはギブアンドテイクに即したいくつかの理由があるが、その中の一つに、『依り代が無ければ現世にいられないから』というものがあつた。

例えばアーチャーのクラスのサーヴァントであれば単独行動という特別なスキルを大元の召喚主である聖杯から与えられているのだが、彼女にそれはない。

故に保有している魔力の量に関係なく——多少は関係あるのだが、彼女自身の保有している魔力の量は決して多くなかった——彼女は消えかけているのだ。

もちろん通常ならば今すぐに消えるというわけでもないだろう。彼女とて一回はその憂き目を味わったことがあるし、あの時は数時間保ったはずだ。

しかし今いる場所は——彼女は全く預かり知らぬことであるが——消滅を感じた時の場所とは勝手が異なる。

有り体に言えば、彼女とこの世界との繋がりというものが一切と言つて良い程に存在していないのだ。

「ひ　あ、ああ、あ——。や、やだ、たすけて、誰か、お願い、お願い！　たすけて、たすけてよ　——！」

確かに今までは目の前で俯せに倒れている男性が依り代の役目を果たしていたのであろうが、彼も同様にこの世界の人間ではなく、今は依り代として成り立たない。

彼を助ける手段があるのに、この身に残った僅かの魔力があれば助けられるのに、それを行使することさえできない。

どうしようもない、絶望だった。

誰か、誰でもいい、依り代となり得る新たなマスターを探さなければならぬ。

かつて自らが喚び出した虚構の暗殺者のように、何か建造物や物体を依り代にすることは叶わなかった。

アレは依り代が触媒をも兼ねていたから可能であった反則技。本来ならマスターは現世に所属している魔術師や死徒、この際ただの人間だって構わない。

誰かいないか、善人でも悪人でもいい、依り代に出来る人間はいないか。

例えば我が身が後に地獄の釜へと投げ入れられても構わない。今この人を助けることができるのなら。

今この瞬間にも命が抜けて逝きつつありこの人を、助けてくれる人はいないか。

もし生前の所業のせいで今の状況があるのだとしたら、自分の五体を百遍引き裂いても足りはしない。

だがそれも彼を助けてからだ。今までとこれからの全てを今に賭けたっていい。今はただ――！

「誰か　そこに　？」

「――ッ？！」

ザリ、と靴が石畳を擦る音がして、魔術師のサーヴァントは顔を上げた。

人の気配のしなかった広場に軽い足音。それは段々と広場の中心にいる自分達の方へと近づいて来て、遂に誰何の声が聞こえてくる。何もかもが没してしまう程の暗闇の中で僅かに見えた光明。

その声を聞いた彼女の顔は、絶望の淵に必死ですがりついた手を聖母がすくい上げてくれたことに感謝するかのように見え。

それでいて、まるで待ちに待った獲物がやってきたかのような、酷薄な笑みを含んだように。

美しい唇がゆつくりと弧を描いたのであった。

A c t 0 - 1 F i n .

Prologue 1 (後書き)

キャス子さんに幸せになって貰いたい奴は手を挙げるおおおお！！

Arcadia様の方にだけ投稿させて頂いていましたが、このたび統合(?)してどちらにも掲載することにいたしました。

結構長いこと放置していましたが、これからはこちらの方も更新の努力をしていきたいと思います。確約できないのは、情けない話ですがorz

どうぞ夏色冬霞の作品を、これからもよろしく願います！

Prologue 2

「—— 郎様」

冬もまだ真つ盛りであろう凍える風が吹き付ける野外において尚、男が最初に覚えたのは、どこか暖かいという漠然とした感触だった。確かに風は間違いなく寒い。冬が長いと言われる街に暮らしていた身がらも、その地域に勝るとも劣らぬ、身を刺すような寒さだ。横たわっているのも清掃が行き届いているとはいえ、野ざらしの石畳。当然ながら非常に冷たい。

それでいて暖かいという矛盾した感触を抱いたのは、すぐ脇に誰かが寄り添っていたからだろうか。

それとも寄り添っていた彼女が、彼にとって特別な存在であったからだろうか。

実直真面目、寡黙を絵に書いたようなその男に問うても答は返って来ないであろうが、とにかく死の間際にいたはずの彼は自らに呼び掛ける声を聞き付け、虚無を宿した瞳を開いた。

「宗一郎様っ！」

「む、う」

男は、先程から半ば異界と化しつつある広場においてひどく場違いだった。

来ているのは深い緑色の、最近ではあまり見ない地味なスーツ。鮮血によって彩られたそれはおそらく、汚れが目立たないからだというだけの理由で購入されたのであろう。

少し離れたところには彼のポケットから零れ落ちたのだろう簡素な眼鏡が転がっているが、それに度は入っていない。

決して平凡ではないが、同時に大勢の中に埋没してしまうぐらいには特徴のない男であった。

俯せであった体は治療のために仰向けにされている。

目を開いた彼の視界に最初に飛び込んで来たのは、一面を涙やら何やらでクシャクシャにしながらも、初めて出会った時と変わらず美しい女の顔であった。

そうか、暖かいと感じたのは、この女がいたからだったのか。

がらんどうの自分が空虚な日々の中で偶然にも見出だした、『自分に意味を与えてくれるかもしれない』存在が、一度は死を実感したこの身に寄り添っている。

それにすら全く波を立てない自分の心にすら感情を覚えることはない。なぜなら自分にそもそも、そういった機能が備わっているのかすら分らないのだ。

情報として読み取った暖かみなのか、心の中から生じた暖かみなのか。それなり以上の年月を生きてきてなお、判断できる程の経験を有していない。

その男は、自分でもそう感じてしまう程に人間味を持ち合わせていなかった。

否、確かに男は人間であった。俗に『人形のように』と形容され

るような人物ではない。

彼が教師として指導をしていた生徒達からは、真面目で公平で頼れる担任だと慕われてすらいる。

生来の、と称するにはあまりに生い立ちが特殊すぎるのだが、間違ひなく彼は社会人として立派に日々を過ごしていた。

そう、彼は生きていた。

、生きたい、と思ったわけでもないだろう。死にたくない、と思ったわけでもないだろう。

何かに衝き動かされていたわけでもない。生を捨てる機会是一次、それまでの生活を鑑みれば十分過ぎる理由と共に与えられた。

しかしそこで死を選ばなかったのは、感情も思考も自己の認識すら許されない生活の中で、何時の頃からか生じた一つの疑問の答を得たかったからだろうか。

本当は、自分がソレを求めているのかどうかすら分らない。

だが満足していなかった。その疑問さえあれば満たされるのではないかと僅かに期待した。

故に彼は、自らの内にその疑問を燦らせながら、只々無為に日々を“過ごして”いたのだった。

彼女に出会い、答への手掛かりを見出だすまでは――

「良かった！ 宗一郎様――ッ！」

石畳に肘をついて上半身を起こした途端、目の前の女性が胸へと飛び込んで来る。

今もなお、習慣と言うには染み込み過ぎている作業として鍛練を続けている彼にとっては、女性一人分の衝撃など大したものではな

い。

対外的には婚約者と名乗っていた女は自分の胸元に縋り付き、まるで子供のように——と言っても子供が泣く姿など見たことはないが——涙でスーツを濡らす。

本来ならば優しく肩でも掴んで抱きしめてやるのが筋というものであろうが、生憎と男にはそういった甲斐性が備わっていなかった。おろおろと手を動かすわけでもなく、だらりと手を下げた常と変わらぬ自然体で彫像のように胸に縋り付く女を見下ろす。

傍から見れば何という無感動で仕方がない男だと憤るかもしれないが、そういった面を承知して、というよりは溺愛している女にはそれだけで十分であった。

今は只、彼が生きていてくれたことを彼に感謝したい。

また失うことの絶望を味わうかと思つた彼女は少し気持ちが落ちて着いても暫くの間、愛する人に抱きついて静かに涙を流し、喜びと感謝を表した。

「キャスター、状況を」

「あ、はいっ！」

暫し只の恋する乙女として幸せを甘受していた彼女　キャスターのサーヴァントだったが、愛する人にして主の言葉に気を取り直すと背筋を伸ばした。

先程までは彼の生死を案ずるあまり他の思考が完全に頭から抜けてしまっていたが、冷静に思考を巡らせて状況を推察する。

だが同時に、目の前の彼を待たせるわけにもいかなかった。

待てと言われれば終末の角笛が鳴り響く時までそのまま待つてい
そうな人だが、そこはそこ、これはこれ。

状況が全く分からず、時間が無限とは限らない以上、それなりに
迅速に動く必要がある。

「宗一郎様は、どこまで覚えていらっしゃいますか？」

「私達が置かれた状況のことならば、全くない。最後の記憶は、金
色をした男が現れ、我々に攻撃をしかけてきたことだけだ」

「そうですか。実は私もです」

あの時、金色の男 間違いなくサーヴァントに類する者である
うが、アレの攻撃を受けて確かに自分は消滅したと、彼女は確信し
ている。

それは一緒にいる男、葛木宗一郎も同様で、彼も静かに死を実感
したのだ。

自らの傷はキャスターが塞いだのだと考えたとしても、不思議と
キャスターには傷一つ残っていなかった。

おかしいことである。なにせ宗一郎のスーツには鮮血と傷が残っ
ているのだ。

傷は塞げても、服までは直せていない。反面、キャスターのロー
ブは一切が万全の状態のまま。

本来あのローブは魔力によって編み上げた武装。彼女の魔術礼装
の一種。

もちろん礼装である以上傷つくこともあるが、一度魔力に戻して
再度編み上げれば元通りになる。

とはいっても彼女自身そのようなことをした覚えはないし、どうにも感触がおかしかった。

言及しづらい例えではあるが、この身は一度消滅し、再構成されたのではないだろうか？

決して断定は出来ないのだが、形容し難い不確かな感触にしても、そのような気がしてならない。

これに関しては勘というか、『そのような感触がした』というものに過ぎないが、考察する価値は十分にある。

再構成か再召喚か。少なくとも自身の持つ意識が記録ではなく記憶である以上は固有時間の連続性が保たれているはず。

今後を考えれば結論は可能な限り早く出す必要があるが、今は一先ず保留としておこう。

「とりあえず、此処は私の神殿ではないようです。大源の様子から冬木でもありません」

大源は世界に共通して存在する要素であるが、酸素に濃い薄いがあるように、湿度に高い低いがあるように、場所によって“色”のようなものが異なる。

それは魔術師としての感覚が優れていればいる程顕著に感じとることができ、キャスター程の大魔術師にもなれば狭い範囲での流れすら読める。

精霊の一種である英霊が暴れ回る一大儀式、聖杯戦争の影響で、舞台となった冬木という地方都市の大源は乱れに乱れまくっていた。当然だろう。あちらこちらで大気中の大源を喰らう魔槍やら、城すら吹き飛ばす聖剣やら、神話に出て来る幻想種やらが好き放題していたのだ。

そうでなくとも龍脈などを利用して街全体に監視網やら何やらを張り巡らせていた彼女は、冬木の街を目の届かぬ場所はないという程に把握している。

だからこそ言えるのだ。此処は冬木どころか、そこから遠く離れた何処ぞの霊地であると。

再度、辺りを見回してみよう。

背後に見える、神代の時代でもお目にかかったことがないような大樹を中心に、石造りの広場が広がっている。

今いる場所は広場の中程で、一番下からは建物何階分かの高さがあった。

建物は統一された景観で広場をぐるりと囲むように建てられていて、聖杯から与えられた現代の知識から鑑みるに、西洋のものであるようだ。

だが、一番注目すべきところはそれらではない。

大気の中の大源の濃度。色も違うが、何よりソレが元いた場所と比較して尋常ではない程に濃かったのだ。

彼女の常識では、神秘とは時代を経れば経るだけ希釈されてしまうものである。

力量によって行使する魔術の威力には多少の差こそあれ、その大元の神秘という概念は、その恩恵に授からんとする万民に等しく分け与えられる。

例えるならば配給される絵の具のようなものだ。

それをどう組合せて新たな色を作るかは個人の能力次第だが、受け取る者が増えれば一人辺りの量は減り、薄めて使わなければならなくなる。

物事の道理として、時代を経れば技術は広まり、それを使う者も必然的に増える。

神秘の秘匿を第一に掲げて最低限に抑えたとしても、結果として彼女の生きていた時代から千年単位で広まった現代においては、魔術は比べものにならない程に衰退していた。

大源も薄まり、呼吸をすることが困難になってしまった数々の幻想種が姿を消す。

過去の人間である自分が行使する魔術と、現代の魔術師が行使する魔術。比べることすら馬鹿馬鹿しい。

だが、今この場には彼女が生きていた神代の時代に匹敵する濃度の大源が存在していた。

具体的に言えば、存在することに必要な分の魔力だけをマスターから供給されれば、後は大気中の大源から魔力を調達して神秘の行使が出来る程に。

現代に於いてこれ程の環境を保持しているのであれば、数多の魔術師達が血眼になって此処という場所を得ようとやって来るであろう。

だからこそ今は深夜であるためか人気がないが、一見すれば賑やかな都市部にしか見えないこの光景に彼女はひどく困惑していた。

「そうか」

素人にも分かりやすいようにかみ砕いた簡略な説明を受けた葛木は、全く感情の籠っていないように聞こえがちな声を漏らす。

キャスターの言う通り、正直に言って状況は全く経験したことがないものと考えていいだろう。

もとより経験したことがないからといって自分から何か行動を起こすつもりはないのだが。

元々彼は、能動的な行動というものに関して殆どと言っている程に縁がない。

強いて言うならば、生涯一度の役目を果たして自害をせず、始末にきた上役を返り討ちにして殺したことぐらいだろうか。

聖杯戦争についても、キャスターが望んだからこそ力を貸した。自分から聖杯戦争を勝ち抜くために何か行動を起こしたことは一度もない。

故に今回おかれた特殊な状況についての対処も、完全にキャスターに任せると決めていた。

それは彼女も契約をした当初から承知していたことではあるし、何より一見まったく噛み合っていないさそうなこれこそが、二人の力たちであるからだ。

「キャスター、お前の後ろにいるのは誰だ？」

と、そこで葛木はようやく、この場にいるのが自分とキャスターの二人だけではないことに気付き、質問した。

先程までキャスターの陰に隠れて見えなかったが、少女が一人へたりこんでいる。

やや後頭部に近いところで二つに縛った特徴的な髪型の名は知らないが、全体的にどこか純朴で素直な雰囲気漂っており、目立つような容姿ではない。

服装は学校の制服らしきもので、手には何に使うのか、やや大きな竹箒を握っていた。

普段から上品な物腰を心掛けているのか、地面に座っていてもスカートの中は——どちらにしても某レールガンよろしく短パンを履いてはいる——見えない。

全体的に、深夜に出かけるような少女ではなさそうだ。

「私は宗一郎様を依り代としていたはずなのですが、何故か現界が出来なくなりつつありました。

彼女は偶然そこに通り掛かったので、宗一郎様の治療のために、催眠をかけて暫定的にマスターとしたのです」

「そうか」

催眠をかけて、ということは、強制的に使役したということである。

彼女程の魔術師になれば、例え魔眼を持っていなくともシングルアクション一工程以上の速さで暗示をかけることができる。

一刻も早く依り代たる新たなマスターを必要としていたキャスターは、何の用事か広場にさ迷い込んで来た少女を操り、自らのマスターとしたのだった。

そして人道に即せば間違いなく悪と称されるであろう所業を耳にしても、葛木は眉一つ動かすことはない。

彼は自分以外の人間に、否、自分自身にもさしたる興味を覚えな
いのだ。

積極的に悪事を肯定するわけではないが、自分に関係ない人間が
どうなるうと知ったことではなかった。

そして自分の目の前でそれらが行われていたとしても、キャスタ
ーが決めた以上は必要なことであると自分でも判断する。

冷徹なわけでも冷静なわけでもなく、どこまでも淡々と生きてい
るからこその対応だった。

「此処が何処であるかは、彼女から聞き出せば良いのではないか？」

「そ、そうですね。では暗示を解きます」

だがそれでいてキャスターから助けを求められれば、作業として行っている日常生活に支障が出ない範囲で助力することに異論はない。

だから今彼女から意見を求められていると解釈した彼は、自分の判断力の中で行動の方針を提示した。

キャスターの背後には件の少女がへたり込んだ状態で虚ろに視線を宙にさ迷わせている。

意識はないのだろう。本来なら従者という立場にある希代の魔女の指先に従う操り人形だ。

専門分野である魔術以外のあらゆる点において全幅の信頼を置いている男の指示に従って、彼女はその細い指先を、少女の目の前を横切るように一振りした。

「あ、あれ？ 私」

「お目覚めかしら、お嬢さん？」

「あれ、貴女は？」

どうやら彼女は広場に來た次の瞬間には意識への介入を受けたりしない。

目の前で膝立ちになってこちらを見ている女性と、既に立ち上が

っているスーツ姿の男性の二人から視線を受け、突然の状況に半ばパニックになっている。

だが、それもまあ常識的に考えて仕方がないことではあった。

何せ目の前の二人は二人共が、非常に不審な姿をしていたのだから。

繰り返しになってしまいはするが、もう一度だけ二人の容姿や服装に注目してみよう。

彼女の前にいる女性は、現代に於いてはコスプレと勘違いされてもおかしくない仰々しいローブを羽織り、フードで顔の上半分を隠している。

僅かに覗く口元だけでもトンデモない美人であろうことは疑う余地はないが、やはり全体的な印象として間違いなく不審な人物だ。

彼女とて社会の裏側についての知識を多く持つ身ではあるが、それにしたってここまで突き抜けた服装をしている知り合いはいないいや、悪いわけではないのだ。紫色のローブは恐ろしいというよりは上品で、眼前の落ち着いた年上の女性にはとても似合っている。だからこそ普通ではない服装を完璧に着こなしているこの女性が常日頃からローブを纏っていることを察し、余計に奇異に写るのだった。

そして女性の背後に立っている男性も、別なベクトルで奇妙な人である。

こちらの容姿は大して特徴がない。美形なわけでもなければ、まかり間違っても不細工でもない。

敢えて形容するとすれば、武骨。それでいて幽鬼のようなという表現も当て嵌まるのだから甚だ矛盾しているが、とにかく造作がゴツゴツしているのだ。

着ているスーツは暗く沈んだ緑色。仕立てに全く遊びがなく、実

用一点主義なのだろう。

そしてそのスーツには幾つもの穴が空き、今し方まで流れていたと思しき鮮血で彩られているではないか。

不審度で言えば女性の方よりもブチ抜きで高い。街中を歩いていたら当然ながら警察官に任意同行を求められる程に。

まったくもって、何故ここにいいのか理解できない二人組である。

「はじめまして、可愛らしいお嬢さん。私はキャスター、こちらは」

「葛木宗一郎だ」

半ば放心しながらも二人を眺めていると、女性が立ち上がりながら手を伸ばして来たので、申し訳ないがその手に掴まって自分も立ち上がった。

それなりの時間座り込んでしまっていたらしく、石畳と接していた膝や尻が冷たい。埃は掃ったが、張り付くような不快感が残っている。

「良かったらもう一度、貴女の名前を聞かせてもらってもいいかしら？」

「あ、はい！ 麻帆良学園女子中等部一年、佐倉愛衣と申します！」

大人であるからか、自分よりは少しばかり背丈が高い。立ち上がる際に下から僅かに覗き見た顔は、やはり想像に違わぬ美しさだ。

姉と仰ぐ上級生にして自分のパートナーも相当な美人であると公言して憚らないが、この女性の美しさは格が違う。

まさに女神のようなという形容が相応しいと、佐倉愛衣は実際に口に出したら次の瞬間には灰にされてしまうだろうことを考えた。

はて、もう一度？

自分がこの女性に会うのは、自分の記憶が確かならばこれが初めてのはずである。

外国の人のようなだからアメリカに留学していた時に会っている可能性も無いわけではないが、このような美人、同性であっても一度見れば忘れはしない。

「まず最初に聞いておきたいのだけど、もしかして貴女は魔術師？」

「え あ、はい、そうです」

「そう やっぱりね。それにしても耐性が随分と低かったみたいだけど」

「 あのお？」

やけに古めかしい言い回しではあったが事実であるため、愛衣はその問い掛けに素直に頷いた。

昨今では組織体制がしっかりと確立されていることもあって、大概は自分達のような術者は『魔法使い』と日本語に訳されている。

もちろん外来語であるために訳し方も多少の違いはあるが、今はそちらが一般的だ。一方ローブの女性が使った『魔術師』という言い回しは昔かたぎの人間が好んで使うものだ。

更に言えば、本来は口ごもるべきであろうところで即答してしまったのは、目の前の女性、キャスターが自分と同じ種類の人間だと確信していたからである。

麻帆良という街は警察官の他にも教師などがある程度の権限をもつて警備を行っているために、都市の規模に対して非常に事件が少ない。

学生同士の小競り合いぐらいなら日常茶飯事だが、それにしても教師が実力行使で鎮圧に来るために大事になったことはなかった。その一方で、夜の麻帆良は極めて物騒な場所でもある。

一流の霊地は、そこに住まう者に様々な恩恵を与える場所だ。例えば麻帆良などでは魔法（魔術）を使うための才能が発現しやすいし、格闘技などの鍛錬を積んでいれば気の習得も早くなる。

他にも麻帆良で起こる様々な事故などで滅多に死傷者が出ないのも、世界樹の加護だと言われているのだ。

しかし世の中は良いこと尽くめではない。同様に、否、それ以上に害意や危険を呼び寄せる。

毎夜のように襲い来る外部の術者や妖魔の類。彼女はそれらを撃退するために駆り出された魔法生徒の一員であった。

また物騒だと言いはしたが、一般人にとってはその限りではない。何故なら敵の襲撃が予想される場所には一般人を遮断する人払いの結界が張られているからだ。

当然ながら世界樹前のこの広場に人気がないのも、人払いの結界の恩恵である。

故に愛衣もローブの女性がコチラ側に属する人間であると判断したのだった。

「実はね、申し訳ないんだけど貴女に暗示をかけさせてもらったのよ」

「暗示?! 何時の間に?!」

「宗一郎様をお助けするには、私の依り代となる現世の人間が必要だった。ごめんなさいね、一刻の猶予もなかったのよ」

西洋魔法にも精神に干渉する魔法はいくつもある。

例えば先程話題に上った人払いの結界もそうだし、他にも薬の類に多く見られるが、意識や思考を誘導させる魔法は存在する。

しかしそれらに共通して言えるのは、基本的に魔法使いには効果が及びにくいという点だ。

これに関してはキャスターの操る魔術についても——原則的にはの話だ。彼女の魔術は並の術者を遥かに上回る——同様である。そして自惚れではなく、愛衣は自分がそれなりのレベルにある魔法使いであると自負していた。

順当な思考と比較の結果である。仮にもアメリカの魔法学校において、優秀な成績で留学を完了したのだ。

地味な雰囲気から目立ちはないが、少なくともエリートと呼ばれるには足る実力者である。

だからこそ自分が暗示にかかったことすら分らないという状況に、まず恐怖よりも先に驚愕を覚えた。

この女性がどれほどの実力者であるのか、自分程度の物差しでは測ることさえできない。

自分の周りにいる魔法使いと比較しても、なお足りない。姉と慕う上級生も大概かなりのエリートだが、それにしだって及びもしないのだ。

おそらくは学園最強の魔法使いである近衛近右衛門を引き合いに出して、ようやく同じ舞台の端っこに立てたというぐらいであろうか。

本国で最高位と言われている術者を出しても、同様であろう。

「ムシの良い話だけど、本当にありがとう。貴女のおかげで宗一郎様が助かったわ」

「え、あ、そ、そうですか？ お役に立てて良かったです」

本当に感謝してもし足りないと言いたげに自分の手を握った女性に、思わず照れて下手に出てしまう。

このような美人にこのような態度に出られては、男は言わずもがな、女であろうと激しく狼狽を覚えてしまうのも仕方がない。

とにかく若輩なりに『立派な魔法使い《マギステル・マギ》』を目指す身としては、誰かの役に立てたのであればこれ以上に嬉しいことはなかった。

その気持ちだけは間違いではない。だから彼女も実害を感じなかったから、さして問題行為を咎める気にもならなかったのだ。

「あれ、依り代って、言いました？ それって一体？」

「ああ、それはね——」

「愛衣——」

一先ず互いに状況を確認しようとした時、つい先ほどまで自分たち以外の誰の気配もなかった広場に新たな声が響き渡った。階段の下から駆け上がってくる、見事な金髪をした美少女。

少々スカートの丈が短い——一般的な基準よりは余程長いのだが——ために不自然な印象はあるが、教会のシスターのような制服を着て、頭には看護婦のような帽子を被っている。

その少女は何を勘違いしたのか必死の形相で自らの従者たる少女に叫ぶと、バトンのような杖を振るって魔術を行使した。

「影よ《ウンブラエ》！」

「マスター、下がって！」

「ふええ?!」

影から何体もの人形が飛びだし、こちらへと宙を滑って駆けける。

ある意味では仕方がないことであつた、彼女が状況を勘違いしたのも。

何せその日に学園の警備に当たる者の中に、妹分の側にいる二人の顔はなかったのだ。

というよりも学園の中でも初めて見る顔である上に、明らかに服装が異様で不審、有り体に言うなら悪役っぽかった。

直情的で正義感の強い彼女のこと、二人を侵入者と判断し、妹分が今まさに捕らわれようとしていると勘違いするのも当然だ。

傍目に見えていて滑稽なのはここからである。

突然の上級生にしてパートナーの出現に驚いた愛衣が彼女に声を

かけようとする前に影の人形はこちらへと飛びかかってきて、今度はキヤスターが愛衣を自分の後ろへと隠す。

魔法使い同士の突然の接敵で、悠長に状況を説明している時間などあるわけがない。

愛衣が状況すら理解できていないままで、彼女を暫定的にでもマスターと仰ぐ事を決めたキヤスターは少女を守るために行動する。

一言二言、すぐ後ろにいた愛衣ですら聞き取れない言葉で何か呟いた瞬間、風の刃が生じて影の人形を尽く斬り裂いた。

「私の人形を一瞬で——?!」

「あらあら、随分と野蛮な魔術師なのね。その程度の人形で私に牙を剥くなんて 愚かと知りなさい」

事前に自らの影の中に待機させていたわけであるが、それでも人形を出す素早さに関しては目を見張るものがあつた。

しかしそれでも神代の魔女からしてみれば未熟も未熟。ただの一言で人形を消し飛ばしてなお、余裕は十分である。

金髪の少女はそれだけで相手の実力が、自らの遥か高みに存在していることを理解した。

「その子を放しなさい!」

「私のマスターに手を出して、ただで済むと思っているのかしら?」

実力の差が歴然であつても、妹分を見捨てるなんて選択肢は持たない。

一方のキャスターも身の程を知らずに牙を剥き、マスターに手を出した女を許す気はない。

両者の誤解は全く解けることがなく、互いに相手を倒さんと魔術の行使を試みたときだった。

「ま、待つてください二人とも！ 何か、何か勘違いしてますー！」

「え、愛衣？」

「あら？」

自分を守るように立ちふさがったキャスターを押しつけ、愛衣が二人の間に壁のように立つ。

その時に金髪の上級生の方に背を向けたのは正解であつた。もしキャスターを庇えば、次の瞬間にはもう片方が消し飛んでいたことであらう。

仮に金髪の少女が彼女の知るとのような魔法を行使したとしても、キャスターには傷一つ負わせることができないだろうからだ。

「一まず、今一度状況を整理する必要があるのではないか？」

ここに来るまで一切の言葉を発することがなかった男の言葉が大きく広場に響いたのであつた。

Prologue 2 (後書き)

脱げ女その他も好きな奴は手を挙げるっ!!!

そろそろ次話、というより最新話の執筆を始めないと更新が滞るなあ。

とはいえ倫敦の方も忙しいし、頑張って執筆を進めていきたいと思っています。

幼稚園、初等部、中等部、高等部、大学、大学院。

麻帆良学園都市はその内部に、尋常ではない数の教育施設を保有している。

揺り籠から就職まで、などというところではない。男子校や女子校、工科系の専門学校もあれば、ミッシェンスクールすら存在しているのだ。

インターナショナルな教育理念——と言っても麻帆良の教育理念の全てを把握している者がいるかと言えば、甚だ微妙だが——に則って留学システムも完備。

あまりにも分岐が多いエスカレーターは、ゆとりある、それでいて多様で高度な勉強環境を生徒達に提供する。

麻帆良出身というだけで名実共に完璧な箔がつくこの都市は、正に世界においても非常に高い評価を受けている日本一の学園都市という称号に恥じない場所であった。

さて、そんな麻帆良の最高責任者が誰かと道を歩く生徒に問えば、誰もが一人の老人を答えるだろう。

日く、妖怪ぬらりひょん。日く、仙人原始天尊。日く、肌色の洋梨。日く、あの孫娘と血縁だなんて嘘だろオイ。

フルネームが全く出てこないのはご愛嬌というものだろうが、とにかく件の老人こそが麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門である。

落ち窪んだ眼窩、白く長い髭と眉。ついでに耳も長く、イヤリン

グ 否、円環で着飾っていた。

なにより特徴的なのは仇名の一つの由来である、エイリアンのように長く伸びた後頭部。専門外の間人であっても、思わずレントゲンを撮らせてくれないかと言わずにはいられない。

ついでに言えば孫娘の近衛木乃香が、こっそりファンクラブが出来るくらいの美少女であることも不思議に拍車をかけていた。まさに遺伝子の神秘。ダーウィンもびっくりだ。

そんな、人外であると大部分の生徒が信じて疑わぬ老齡の学園長は今、女子中等部の校舎にある学園長室で来訪者と相対していた。机にかけている学園長の右隣りには老け顔の教師が一人立っている。

地味な草色のスーツ、手入れを怠っているであろう不精髭、口にくわえた火の点いていないマルボロ。

くたびれた大人という印象が強いが、無造作に片手をズボンのポケットに突っ込んだ何気ない姿勢には殆ど隙が見られない。

さもありなん、彼は俗に本国と呼ばれる魔法世界においてA A +
ウンドゥス・マギクスの戦闘評価を受ける程の卓越した使い手である。

ぶっちゃけた話、この学園、ひいては東日本における最大戦力の二人が同じところで油断せずに目の前の人物達が驚異であるかどうかを量ろうとしているのだ。

「ふむ、まずは自己紹介といこうかの。

僕は麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門じゃ。関東魔法協会の理事も務めておる」

「 関東魔法協会 ” 大した名前ね。

私はキャスターのサーヴァント。こちらは前のマスターであつた

「

「冬木の穂群原学園で倫理と現代社会の教師をしている、葛木宗一郎という」

彼らの目の前には何もかもがてんでんばらばらな、三人の男女が立っていた。

紫色の古風なローブを羽織り、フードで顔の大部分を隠した女性。血まみれのスーツを着ている仏頂面の男性。そして 何やら怯えている女子中等部の生徒。

仕方がない。学園最強の二人の視線を浴びるなど、今まで数度、それも大勢の中に埋没している状況でしかないのだ。

元々目立たない性質である彼女が姉と仰ぐ上級生という盾なしに他人の前に出ることが、そもそもアメリカに留学していた頃以来の経験である。

（うえーん、なんで私までこっちにいるんですかあー?!）

おそらく完全な第三者が今の状況を観察すれば、この場の主役は間違いなく彼女、実は何の罪もない哀れな佐倉愛衣だと判断するにとだろう。

何せ学園長の真正面にいるのが愛衣であり、現在は彼女をマスターと仰ぐキャスターがその側に寄り添い、そのキャスターに葛木が寄り添っている。

実際は全く状況を把握できていない上に誰の手綱も握ってはいないのだが、まるっきり手練れの従者を二人侍らせた魔法使いの図であった。

もちろん再三になるが愛衣は全く状況を把握していない。

ここに来ることも、姉と慕う上級生　高音・D・グッドマンと、自分をマスターと呼ぶキャスターなる女性が話して決めたことだ。割り込みづらい会談に二人に声をかけることも躊躇われた愛衣は隣で同様に立ち尽くしていた大人の男性、葛木とコミュニケーションをとろうとして　　気まづくなつたので早々に諦めた。

何しろこちらの話に対して「ああ」やら「そうか」やら「成程」やら、三文字以上の返答が返ってこないのだ。初対面でこれでは心が折れてしまう。

彼女も比較的内向的で、社交性に欠ける部分があつたのだ。正直どうやってアメリカという国でやっていけたのか不思議に思われてしまう程に。

（お姉様あ、一人にしないで下さいよう　　！）

一方この場で唯一の味方——無論そんなことはないのだが、今の彼女には正常な判断力が欠けている——である高音はといえば、部屋の隅で何やら不機嫌そうにしている。

これもまた理由は単純明快。自惚れではなくそれなりに自信があつた魔術をいとも簡単に破られてしまったのと、よりによってその女に妹分を盗られてしまったからだ。

直情的で思い込みが激しく多少油断することも多いが、高音は年齢に比して極めて優秀な魔法使いであつた。

そも彼女が得意としている影を使った魔法は習得自体が非常に困難で、使いこなせるようになるのも長い修練を必要とする。

影を加工した極薄の刃や操り人形。影から影へと移動する転移魔法や、相手の影に干渉することで行動の自由を奪う影縫いなど、一癖も二癖もある魔法揃いだ。

だが高音はそういった側面もあつて使用者が極めて少ない影の魔法を、比較的高いレベルで行使することができる。

そこには確かに彼女が生まれ持った才覚というものが関係してはいるだろうが、やはりそれ以上に自らに妥協を許さない真摯で高潔な高音の姿勢が影響しているのだろう。

世のため人のためになることを目指して努力を怠らない高音は上役である魔法先生達からも高く評価されている。今の麻帆良の看板生徒と言ってもいいかもしれない。

だからこそ自分の魔法を兎戯に等しいと言わんばかりに破つてみせたローブの女に激しい憤りを抱いているし、その女性と大事で可愛い妹分が現状セットになってしまっていることも甚だ不愉快であった。

尤も確かに感じている憤りが嫉妬や憎悪などの黒い感情ではなく、不甲斐ない我が身に向けられているあたりは、なんだかんだで正義感の強い彼女らしさを表しているのだが。

「サーヴァント　とは、一体何のことかね？」

「あら、大層な見てくれの割には意外と無知なのね、老魔術師。いいでしょう、どうせ大した情報でもなし、いずれは知られてしまいことだしね。

それに、まだ私のマスターにも説明が出来ていませんから」

自分に礼を述べた時とは一転、見事なまでに挑発的な態度に驚いていた愛衣は突然また自分の方に視線を向けられて、びくりと身を震わせた。

室内であるというのに頑なに脱ごうとしないローブから見えるのは、紫色に彩られた細い唇のみ。

ともすれば下品にも見られがちな口紅は、しかし彼女に限ってはとてもよく似合っている。

市販のものだろうか、もし機会があったら是非にも化粧のコツを教えてもらおうと、半ば現実逃避気味に愛衣は頭の片隅ど考えた。

「サーヴァントとは、有り体に言えば英霊よ。生前に人の身では余りある偉業を成し遂げ、仕事に民草の信仰によってその存在を精霊の域にまで高められたもの。それが私」

「英霊　なるほどのう。つまりお主は英雄譚や伝説に出て来る登場人物とな？」

「概ね、そう考えて構わないわ」

何気なく、さもどうでもいいかのように口にしたキャスターの言葉に、その部屋にいた彼女自身と葛木以外の全員が凍り付いた。

始めに思ったのは、噛み砕いて言うところ「何言ってるんだコイツは？」である。少なくとも自身が英雄であると言われて素直に『ああそうか』と頷けるわけがない。

これがタカミチの旧知の人物であるナギ・スプリングフィールドが言ったなら不思議な説得力があった———というか実際に公言し

て憚らなかった——だろうが、初対面が相手ではあまりにも荒唐無稽というものであるう。

どちらにしてもナギがもう一人いるという事態と比べれば、今の状況の方が幾分マシなのかもしれない。

それでいて本人を憎めない辺りがあの男の人徳というもののだとは思うのだが。

「あの、もしかして“依り代”ってというのは？」

「ええ、貴女の考えている通りよ、マスター。

基本的に死者である私は現世に留まることができない。現界しているためには生者を標とし、現世という海に錨を打ち込む必要があるわ。それが貴女」

まず最初に考えを改めたのは一同の中でも最年少であるが、初めにキヤスターと接触した愛衣であった。

高音が広場にやって来る前に聞いた言葉を思い返せば、成る程、今の話にもあの時の感謝にも合点がいくというもの。

知らない内に暗示をかけられて操られたことは確かに不快ではあるが、それでも結果として一人の命が助かったのだと考えれば気分も決して悪くない。

学園長らに見せる酷薄な笑みが少々気になりはしたが、それでも自分の方に向ける穏やかな微笑みがやけに記憶に残り、悪い人だとは思えなかった。

ちなみにいくら裏切りの魔女たるキヤスターとて、宗一郎同様、恩人に直ぐさま仇で返すような者ではないから、実は愛衣は的確に

彼女の本质を見抜いていたことになる。

もつとも当の愛衣本人はそこまで考えているわけではなく、あくまでも直感に近い結論ではあった。

しかしやはり、優しさは優しさを引き寄せるのである。その点まだ未熟な少女は、この世界の魔法使いらしく十分な優しさを持ち合わせていたのだった。

一方また別な方向でキャスターの言葉に信憑性を感じたのは、先程から何時でも愛衣を庇うことが出来る位置にスタンバイしていた高音である。

彼女もまた、自らが全く感知できない催眠を仕掛けられた愛衣と同様に圧倒的なまでの実力の差を感じさせられた一人であった。

たまに修業の一環として魔法先生に稽古をつけてもらうことがある彼女であったが、比べものにならない程の差を感じたのは上位の数名だけ。

それにしただって地道に修練を重ねていけば将来的には追い越ることが出来るかもしれないという程であり、紫色の魔女に感じたような、天と地ほどの差ではなかった。

だからこそ彼女が自らを英霊であると自称しても、少なくとも実力に関しては相応以上であると認めざるをえないのだ。

「到底、信じられんなあ。ナギの馬鹿ではあるまいし、自分が英霊だなどと言われてものう」

葛木が身分証明として差し出した教員証——IDカードのようになっている——を確認しながら、学園長は困ったように嘆息し

た。

一緒に挟まれた教員免許のコピーには一見したところ一切の不備がなく、使い込んだ跡があるために偽造と断定するわけにもいいい。

多少時間をかければ自分の権限で本当に登録されているかどうか確かめることもできるが、何しろ時間がかかる上にさしたる成果があがるとも考えられない。

何故ならこういった証明書を偽造する場合には、外見を精巧に似せるだけではなく、本当に書類から、真つ当な手段に極めて近い方法で作ることが多いからだ。

かく言う彼自身も権限を利用して何度か行ってきたことであるし、近い内にはもう一回手配する予定もある。 こちらは一先ず保留が無難だろう。

「では証拠を見せましょうか。 ほら」

「な、なんと?!」

「消えた ?!」

だが怪訝な顔の老人を前にキヤスターはそう言つと、次の瞬間には霞のように消え去ってしまったではないか。

何の予兆もなく瞬時に消え失せてみせたキヤスターに、学園長だけではなくタカミチも高音も瞬時に身構えて辺りを警戒する。

気配遮断? 透明化? 空間転移? どちらにしても魔法の行使を疎外する特殊な結界を張つてある学園長室で、このように魔法を

使うことなどありえない。

いくら相手が途方もつかない程の実力者だと認識している高音ですら、それに関しては認めているのだ。なにせここは言わば学園長の土俵なのだから。

それに例え結界の効果を振り切ることができたとしても、魔法を使ったのであれば必ず某かの反応が残る。

だからこそ目の前で行われた霊体化という現象が、魔法によるものではないのは明らかであった。

「ご理解いただけかしら？」

「ふーむ、少なくとも君が人間でないと言うことに疑う予知はなさそうじゃのう」

「難しく考える必要はないわ。要は、今の私は彼女の使い魔のようなものということよ」

「成る程のう。しかし、まだまだ聞かねばならんことはたくさんあるぞい。葛木君　と言ったかな？　彼との関係や、どういう目的で、どうやってココにやって来たのかじゃ」

麻帆良は侵入者を感知する結界によって囲われており、その結界の管理は最強の魔法使い——諸事情あって力を封印されてはいるが、こと知識に関しては一番だ——によって成されている。

故に麻帆良に侵入しようとする者は尽く学園側に存在を知られることとなり、ついでに言えば結界の精度は文字通りオコジヨ妖精一匹通さぬ程だ。

だが、今回その結界は彼女達の侵入に反応しなかった。おそらく高音と愛衣の報告が無ければ当分の間は気付けなかっただろう。

由々しき問題だ。まるで侵入を感知出来ずに、これほどの術者が麻帆良の内部に入り込んだのだ。関東魔法協会として厳粛に対処しなければならない。

この辺りは組織としての体面やら何やらが関係するややこしい部分であるが、それらを馬鹿にして笑い飛ばすことが出来る者などいはいない。

世界を跨ぐ大きな勢力を持っていたとしても、あくまで魔法使い達は社会の裏を生きる人種である。

当然ながら、社会の裏を安定して生きていくためには大きな組織の庇護がいる。影から彼らのような魔法使いを支援するために、関東魔法協会は弱みを見せるわけにはいかないのだ。

不安要素があるなら早急に確認し、対処する必要がある。判断は慎重に的確に、それでいて万が一にも失態が外に知れない内に、だ。

「わからないのよ」

「ほ？」

「だから、私にもわからないのよ」

しかし、それなりの舌戦や腹の探り合いを想定してひそかに身構えていた学園長その他は、さっきまでとは一転、心底困り果てた様子のキヤスターに思わず間の抜けた声を漏らした。

わからない、とはどういうことか。某かの目的を持って、東日本

最大級の霊地であるこの麻帆良までやって来たのではなかったのか。悪意を携えた侵入者に、普段は好々爺然とした態度の学園長は一切容赦する気はない。学園を、ひいては魔法大国へと成長しつつある日本の半分を維持する者として責任を負っているからだ。

だが一方でやむを得ない事情を持った者に対して、必要以上に強く当たるといこともなかった。むしろ協力的とすら言ってもいいだろう。

そうだった特殊な事情を抱える魔法使いの力になってやるのもまた、関東魔法協会理事、つまりは麻帆良の学園長である自分の持った役目なのである。

だからこそ、割と深刻な事情というものを想定して対応策を既にいくつか検討していたわけであるが、この答は流石に予想外であった。

「宗一郎様は元々の私のマスター 依り代よ。私達はちょっとしたイザコザに巻き込まれていて、あのとき確かに命を落としたと思っただわ。

でも気付いたら何時の間にかこんな一流の霊地に 。何があったのが、私の方が聞きたいぐらいよ」

説明が全く要領を得ていない。おそらくはキャスター自身も未だに答を模索している状況なのだろう。半ば独り言のようにそう呟いた。

『何時の間にか』？ ならば空間転移か、催眠をかけられて意識の無い内に密かに運び込まれたか 。どちらにしても、有り得ない。

そも転移の魔法は上級の術者であれば行使する者も少なくないし、それなりの設備があれば超長距離であろうと越えることができる。

だがどちらにしても言えるのは、水や影、予め据えて置いた石碑など、何かしらの媒介が無ければ極めて困難であるということだ。

「私に関して言えば、霊体に過ぎないから一度再構成されたという可能性もあるけれど、宗一郎様は生身だし」

「どちらにしても麻帆良の中に転移するのは困難じゃし、成功したとしても結界には引つ掛かる。どうにも合点がいかんのう」

更に言うならば、関東魔法協会の本部とも言える麻帆良が、転移による侵入に対して備えをしていないはずがない。

許可されている者以外の転移は幾種類もの結界によって妨害されるし、よしんば突破されたとしても突破されたという事実はしっかりと確認できるはずなのだ。

そも術としての名称は空間“転移”であるが、現実空間である三次元においては確認できずとも、何処かしらを経由して移動しているということは研究論文でも示されている。

それを感じすらできないのは概ね一つしか考えられない。則ち別世界からのジャンプ、魔法世界を経由しての転移である。
ウインドウス・マギクス

（しかしまあ、冬木という地名からして日本国内じゃしいう）

宗一郎から渡された教員証その他の身分証明書を確認すれば、そこにはしっかりと西日本の某県の住所が記載されていた。

もとより現実世界と魔法世界を繋ぐゲートは全てが確認されており、今のところゲート以外を使つた行き来は報告されていない。

甚だ理解に苦しむことではあるが、おそらく魔法世界を経由したという可能性は0に近いだろう。

「ではお主らは事故という形で麻帆良にやって来た、こういう解釈で構わんかの？」

「そうね、何者かの意図が働いているという可能性も否めないけど、今のところはそう考えるのが自然かしら」

「何物か。その辺りは追々調べていく必要があるそうじゃな」

「私達に何かを出来る者というのもあまり想像できないけどね」

結論自体は簡潔だが、問題はそこまで簡単ではない。なにしろ殆ど全てのことが曖昧で推測の域を出ず、麻帆良に害なす可能性も完全には払拭されていない。

だが少なくとも今は互いに同じテーブルに座り、取引というよりは協力して議論するという形で交渉を行っている。

長年の経験に照らし合わせて相手を見るに、確かに扱いにくい要注意人物であるうが、今のところ敵対というスタンスをとる必要はなさそうだ。

部屋の隅に待機してじつと黙っている高音が異様に身構えて警戒していることから伺えるキャスターなる女性の実力を——多少は高音の過大評価と考えるにしても——鑑みるに、懸念が少し和らいだといってもいいだろう。

「ところで今一つ聞いておきたいのじゃが、お主らが巻き込まれと

ったイザコザというのは――」

「プライベートよ。慎みなさい」

「いや、そうではなくての、お主らが麻帆良に来たことでソレがこちらに飛び火してくる可能性はないか、と聞きたかったんじゃない」

そう、彼女達自身に害意がないと分かった以上、学園長はそれを一番懸念していた。

自らを英霊と自称する彼女程の手練れが不覚をとるまでの事態。例えばの話だが、もし葛木教諭の傷の下手人が彼らを追い掛けて麻帆良までやって来たりすれば。

普段から相手している侵入者達とは比べものにならないぐらい厄介な相手となる。こちらとしても、それなりの用意が必要だ。

ちなみに学園長の頭の中に、厄介事を嫌って彼女達を追い出してしまおうなどという、ある意味では至極真つ当な考えはない。

魔法使いとは須らく力を持たない者の助けになるべきであり、関東魔法協会という組織になってもその行動理念は変わらない。

命の危険すらある程の窮地に陥っている人間を見捨てるなど、『立派な魔法使い《マギステル・マギ》』のすることではないのだ。

請われれば保護もするし、組織として、近右衛門個人としても出来る限りの援助の手を惜しむつもりはなかった。

「ああ、おそらくそれはないわね。というよりも数日で騒ぎは治まるでしょう」

「ほ、それは本当かの？」

「ええ、おそらくは。何事にもイレギュラーはあるから断言はできないけど、ここまで影響が及ぶことはないと考えて構わないわ」

冬木の地で巻き起こった第五次聖杯戦争は、キャスターが離脱した時点でセイバーとランサーの二騎のサーヴァントを残すのみ。

本来なら残ったサーヴァントが一騎となった段階で万能の願望器たる聖杯が現れるから、残った二人の性格を考えればあの時点で聖杯戦争は殆ど終わったと断言しても構わない。

少なくとも二人とも正面切つての勝負を好みとしているようだから、あれから時間をおいて戦うということもないだろう。

遅くとも数日で勝負はつくと考えて間違いない。それ以上は考えられないのだ。

だがキャスターが気にかかっていたのは、最後に自分達に攻撃を仕掛けてきた金色の鎧を着た男。

あれ程の力を持った存在、サーヴァントとしか思えない。ならばあれ以降も、間違いなく冬木の街は波乱に充たされたことだろう。

「ふむ、では次の問題は君達をどうするかじゃな」

「どうする？ まさか、貴方達程度で私達をどうこうするつもり？ 身の程を知りなさい」

「な、何を勘違いしとるんじゃ？！ 儂はお主らに危害を加えるつもりはないぞい！」

「あら？」

「まったく、その好戦的な態度をどうにかせんと、余計な誤解ばかり生むぞい」

次々に変化する状況に些か神経過敏になっていたキャスターが学園長の言葉に反応し、二階分程の吹き抜けを持つ大きな学園長室に濃密な殺気が立ち込めた。

すかさず今まで一切会話に参加せずに事態を静観していたタカミチが両手をスボンのポケットに入れて身構え、高音も高音なりに杖を構えて戦闘に備える。

一方すかさず諸手を挙げて降伏の態度を示した学園長は、実は一同の中で一番賢明であった。

実力差を察して無駄に終わる戦いを諦めたというわけではなく、単純に戦わなくて済む相手とわざわざ戦って誤解を深める愚を犯しなくなかったのである。

まあ実際問題として彼ぐらいの術者であれば、最終的な勝敗は揺るがないとしても、キャスターと戦っても程々に良い勝負にはなる。そういうこともあって、他の二人よりは幾分余裕があったということもあるのだが。

ちなみにキャスターの言った“私達”の括りの中にちゃっかり入れられてしまった愛衣はと言えば、今すぐにでも意識を手放してしまいたいとも言いたげに目の端に涙を浮かべて震えている。

彼女としては知らない内にはあっても人助けをしただけのはずなのに、先程から理不尽な状況に置かれて踏んだり蹴ったり気分だった。

「つまりじゃな、お主達が望むなら冬木までの交通の手配をするぞい、と言いたかったんじゃ」

「冬木まで　？」

「うむ。まあちよつとした事情聴取には付き合ってもらいたいから、今すぐというわけにはいかんかの」

さて、ここは非常に考えどころである。

今の冬木に戻ったところで、確実に聖杯戦争が終わっているとは限らない。もし続いているところに飛び込んでしまえば、地形的有利がない状態で戦闘を行わなければならない。

また例え聖杯戦争が終わっていても、あのような土地で英霊である自分が現界しているのは非常に危険であるし、何より今のマスターの都合もある。

当然ながらサーヴァントはマスターから遠くは離れられないから、もし冬木に戻るとすれば隣ですっかり怯えてしまっている純朴な少女にもついてきてもらわねばならない。

一見したところココに通っている学生のようにあるし、それは叶わないだろう。なにより戻るメリットが全くと言って良い程になかった。

いや、強いて言うなら隣で普段と全く変わらず立ち尽くしている、元マスターの方が問題か。

この世に属さぬ自分と違い、彼は冬木の街で教職に就いている身である。仕事があるのだから、彼だけは元の地へ戻さなければならぬ。

何より彼とは契約の際に、彼の普段の生活を乱さないようにと命令されている。自分勝手な我が儘に突き合わせることは忍びない。

だが道理として彼を帰さなければと思う一方で、どうしても、万難を排してでも最愛の人と一緒にいたいと思わざるを得なかった。言うなればこれは後にも先にもない大きなチャンスである。聖杯を求めなくとも、戦わなくとも彼と一緒にいられるかもしれないのだ。

どういうわけだか知らないが、本来なら大聖杯のバックアップがあつてこそ現界が可能なこの身が、マスターからの僅かな供給だけで存在出来ている。

これなら聖杯に受肉を願う必要もなければ、他のサーヴァントと戦い必要もない。

英霊であるこの身を狙う魔術師がやって来るかもしれないが、平穩に過ごせば可能性は低くなるし、大源が濃いこの霊地ならば魔術行使にも問題はない。

また、マスター二人に彼の素性を知られてしまっている以上、向こうの状況がわからないままに帰していいのかという懸念もあった。いや、理屈をこねるのは止めよう。とにかくもし彼がこの地に留まることを了承してくれさえすれば、自分が切ない程に望んだ、さやかで平穩な生活を遂に手にすることができるかもしれないのだ。

愛する人と一緒に居たいという何物にも替えがたい望みと、愛する人のためにこそ一緒にいてはいけないのではないかという考え。矛盾する二つの思考に結論を出すことができず、キャスターは宗一郎の方を向いた。

「宗一郎様」

「お前の考えを言うがいい」

血に汚れた渋い緑色のスーツ。自分と関わらなければ彼が傷つくことはなかったはずだ。

それを悔やむ気持ちもある。それが嬉しい気持ちもある。悪いことなのかもしれないが、彼が自分と一緒にいてくれる証明だとも思った。

だからこそ、彼といたいというのが自分だけの気持ちであると負い目を感じていたこともある。

彼の優しさは嬉しさで体が痛いくらいに感じていたが、まだ不安。もしかしたらそれこそが自分の業なのかもしれないが。

だから正しく進退窮まるところで、自分では判断がつかなかったのだ。

「私は、お前の考えに従おう」

「ですが宗一郎様、本当によろしいのですか？」

「構わん」

言葉は少ない。だがしかし、宗一郎は決して考えもしないでこの言葉を言ったわけではなかった。

再三になるが、彼は只求めている。

自分に存在する価値をもたらしてくれるもの。自分が死ぬ瞬間に、ああ、これこそが自分がこの世に生まれて来た理由だったのだと納得できるもの。

ただ一つ、その答えだけが欲しかった。その答えだけを求めている。

今まで惰性ながらも淡々と生きてきたのはその為だけに。そして

それは、今までの人生で得ることはなかった。

だが一月弱ほど前に彼女、キャスターに出会い、彼はそこに何かを見いだした。

それは本当に些細なもので、それでも今までの人生の中で僅かに彼の琴線に触れたもの。

始めこそ『美しい女であった』という理由であったそれは、共に日々を過ごす内に別の感情へと変わっていく。

それが俗に言う恋や愛なのであるかは彼のあずかり知らぬところであったが、それでも彼の感情に僅かでも揺らぎを生んだことだけは間違いない。

本当に少しずつ、非常に不確かなものではあったが、彼は何かを掴みつつあることを感じていた。

今まで全く掴むことが出来なかったものへの手がかりは、紛れもない彼女であるのだろう。

ならば彼女と共にいるべきだ。いや、いたい。この感触、感情の答えを知りたい。

実際にはそこまで明確な思考ではなかったが、それでいてやつぱり明確な思考の結果として、宗一郎はキャスターの言葉に頷いた。

思考の流れとしては目的に行き着くまでの合理的な過程であったのかもしれないが、同時に理屈ではない感情を抱えていることも自覚している。

つまるところ彼は常に岸の見えない海の中でもがいていて、今も尚もがき続けているのだ。

断じて機械などではなく、それでいて人間であるのかも確証がない。

本当は先程不確かだと断じた、恋や、愛の類の感情を覚えているかもしれないが、それを断言できる人間ではなかった。

ある意味では互いに求め合っている、非常にお似合いのカップルである。

「ありがとうございます」

おそらくそれは、自分を必要としている者のためにあるうとする優しさの一種でもあったのだ。

だからキャスターは葛木の意志を感じて、先程までの高圧的な魔女の態度とは一点、涙を流して俯いた。

喜びと、申し訳なさと、やはりソレを遥かに上回る喜び。

長い年月と過酷な生涯を経て漸く安住の地を得た嬉しさが、大勢に裏切られて漸く手に入れた愛する人から受けた優しさに対する嬉しさが、それらが流させたとても綺麗な涙だった。

「私は依り代であるマスターの傍を離れることが出来ないわ。冬木には戻れない」

「ふおっふおっふお。成る程、確かに道理じゃのう。ではどうするか」

「出来れば人としての身分を与えてくれるようなら良いんですけど、貴方にはそこまでの権限があるのかしら？」

「ほ、そりゃちいと儂を過小評価しすぎじゃい。お主ら不審人物二人ぐらいの戸籍なら、ちょちょいっと弄るコトぐらい簡単じゃ。まあ麻帆良の中に限定されるがの」

人前である為かすがりつくことはしないで暫く涙を流していたキヤスターが顔を上げてそう告げると、近右衛門は嬉しそうに髭を撫でると考え込んだ。

彼女は要注意人物ではあるだろうが、この様子を見れば問題はあまるまい。ここまで綺麗な姿を見せられてはそう思わざるをえない。

さて、彼女がそう望んでいる以上、二人を麻帆良に迎える事に関して積極的に考えなければならぬだろう。

このような魔法使いに職を手配してやるのも関東魔法協会の仕事だ。もちろん出来る範囲でという話になりはするが、利便を図ってやることに吝かではなかった。

ちなみに空気が一気に穏便になった為、愛衣と高音は互いに少しずつ距離を詰めて漸く隣同士になっていた。

彼女達とて日々『立派な魔法使い《マギステル・マギ》』を目指して修行しているとはいえ、年頃の少女。

目の前でここまで綺麗な涙を見せられてしまつては、多少歩み寄らざるをえない、歩み寄つてしまつところがある。

とりあえず一番嬉しかったのは険呑な空気が和らいだことであるのだが。

「ふむ、しかし流石に直ぐに職を用意してやるわけにはいかな。

詳しい事情聴取の準備もあることじゃし、明日にでもまたココに来て貰つても構わんかの？ 今夜はこちらでホテルを手配しよう」

「構わないけど、当然黙秘権はあるんでしょね？」

「勿論じゃ。まあそう堅苦しいものにはならんよ。ココの最高責任者は儂じゃからな」

涙を見せたことが恥ずかしいのか、ローブの袖で口元まで覆ったキャスターが不機嫌な声で言う。

本来の彼女は非常に純真な少女であつたのだが、残念なことに長年魔女と呼ばれ続けたためにしょうねが多少曲がつてしまつていた。その曲がつた部分だけ見ていれば性悪の魔女であつたのだろうが、宗一郎との会話で見せた涙から本来の性格の一端を察してしまつた以上、むしろ魅力的な仕草に見えてしまう。

弱みを見せないのが交渉の基本であるのなら、戦況は先程までとは一転まるきり学園長側に有利であつた。

もちろん戦力としてキャスターの側が勝っているから学園長も調子に乗ることはなく、だからこそ逆に彼女にとって不幸なことに、戦況はこれ以上ゆるがないのである。

「高音君、愛衣君、悪いんじゃがキャスター君と葛木君を駅前のホテルに案内してくれんか？ 君たちが到着する頃までには部屋の手配をしておこう」

「了解しました。行きますわよ、愛衣、お二人とも」

「は、はいっ、お姉様！」

少しだけ警戒を解いたらしい高音の先導で、愛衣に寄り添うようにキャスターが、キャスターに寄り添うように葛木が学園長室を出て行く。

最後に扉を閉める時に葛木が静かに、それでいてしっかりと謝意を表して頭を下げていったのが印象に残った。

成る程、色々と多少の些細な懸念事項はありそうだが、一先ず人柄自体に問題はなさそうだ。

教員として務めていた経歴も長そうである。最近とみに不足がちな教員達に少しだけ楽をさせてやることができるかもしれない。

まだまだ最終的に判断を下す程には信用できないが、今は学園側に害を為す意思がない以上は、新たな魔法関係者が一人麻帆良に入ってきただけのことだ。

「高畑君、中等部の社会の先生が一人、定年退職したんだったかのう?」

「ええ、ちょうど良いですね。彼なら広域指導員も任せることができそうだ」

「ほ? どういうことじゃ?」

「隠しているようでしたが、彼は中々の使い手です。正中線にブレがなかった」

真っ直ぐに立つということは存外難しい。

そもそも人間の臓器は左右対称に配置されていないし、腕や足の長さも左右で違う場合がある。

砂漠で真っ直ぐに歩くのが如何に困難であるかというのは有名な話であるが、歩き方、立ち方も似たようなものがある。

手練れのタカミチの目から見ても、葛木の立ち方、歩き方は完璧と言って良い程に完璧なものであった。

正中線を保つというのは、武術において非常に大事なことである。

例えば琉球王国に伝えられていた武術の秘伝にもそういうものがあるし、人体の急所も正中線に集中している。

しかし習得が非常に難しい上に効果が地味——一見するとわからない——なために、しっかりと修行しようとする者は少ない。もとより完璧な歩き方、立ち方などというものは生半可な修行で手に入れられるものではないのだ。

だからこそむしろ彼が警戒していたのは、一見して脅威と分かるキヤスターよりも一般人に見えがちな葛木の方であった。

「コチラでどのぐらい使えるか分かりませんが、少なくとも一般人としてはかなりの手練れと見えます」

「君にそこまで言わせるとは。ふむ、色々調べなければならんことが増えたか」

「冬木、でしたか。至急調査をさせます。西は麻帆良の影響力が及びにくいですから、直ぐというわけにもいきませんが」

「わかっておる。まあ必要以上に焦ることもないわい。大したことではなさそうじゃ」

だが一度下した評価自体は揺るがない。過去に何があったとしても、今の人柄で彼は評価する。

例えばそれは世間では凶悪犯と通っている真祖の吸血鬼についても同様であり、彼女達についても同じであった。

生徒達からはとても信頼されているというわけではないが、それでも彼には長年の経験から得た判断力がある。

それを知っているタカミチもまた彼の判断を信用して、会談中は一切手を出そうとしなかったのだ。

これが新たな問題呼び込むのか、それとも何も起こらないのか。

神ならぬ人の身では、自分の判断を信じて進んでいくしかない。

とりあえず今は彼女達に与える仕事の選別をしようと、学園長は彼の秘書も兼任している魔法先生を呼び出したのであった。

P r o l o u g e 3 (後書き)

キャス子って実は凄いんだぜ！ と信じてやまない奴は手を挙げろ！
段々勢いが無くなってきたますが、ご愛敬（笑）。

とりあえず色々と説明足りてませんが、そこは次回以降に回しました。

ではまた次回にお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8469o/>

麻帆良在住、葛木メディアでございますっ！

2011年3月28日21時22分発行